― 公 示 ―

会員大会

大阪キリスト教青年会会則２５条により
２００６年会員大会を次の通り開催します。

大阪キリスト教青年会
常議員会議長　長尾　ひろみ

日時：２００６年５月２７日（土）　午後３時～５時
場所：大阪ＹＭＣＡ会館　大阪市西区土佐堀１－５－６

プログラム
１．会員表彰（奉仕の書に誌する会員）
２．報告と協議
（１）常議員の選任
（２）２００５年度事業および会計の報告
（３）２００６年度基本方針の説明
（４）２００６年度事業計画および予算の報告
３．交流歓談の時

傍聴について
維持会員（本年３月３１日現在）以外の会員は、常議員会に届け出て傍聴することができます。
希望者は５月１２日（金）までに書面で大会事務局（大阪市西区土佐堀１－５－６　大阪ＹＭＣＡ統括本部）へお申し出ください。

…♪♪東西南北♪♪…♪♪東西南北♪♪…♪♪東西南北♪♪…

ワンワールドフェスティバル

「何かを」という思いを形に…

２月４日（土）～５日（日）の二日間、大阪国際交流センターにてワンワールドフェスティバルが開催されました。普段は口にすることができない外国の料理の販売があり、約２００の団体がそれぞれの活動をアピールするブースを出展しました。

私たち国際リーダーも、なかのしまワイズメンズクラブの方、ミャンマー・スリランカのキャンプに参加した方々と共に大阪ＹＭＣＡのブースを設けました。ミャンマーの民芸品販売に合わせ、ブースを訪れた方々にスリランカやミャンマーの子どもたちへのメッセージを書いてもらいました。メッセージは用意した小さな布に書いてもらい、それをタペストリーにしました。また、子どもたちには「ぴょんぴょんガエル」を２つ作ってもらい、１つを自分に、もう１つをスリランカやミャンマーの子どもたちに贈ることを説明し、絵やメッセージを書いてもらいました。「国際」に関心を持っている人が多く、メッセージも思っていた以上に集まり、タペストリーはこれからの活動に是非つなげていきたいと思いました。また、他団体の方と出会う機会もあり、高い志を持っている方々がこんなにいるのかと励まされました。

４日の午後には大阪ＹＭＣＡ主催で「世界の手話講座」と「青年と共に考える国際協力」のプログラムが行われました。聴覚障がい青少年国際キャンプ（Ｈ．Ｈ．キャンプ）に参加したリーダー３名が挑戦した「世界の手話講座」には約30名の参加があり、様々な意見が手話を用いて交わされ、最後まで和気藹々とした雰囲気に包まれていました。

大阪ＹＭＣＡの３名のリーダーがパネリストとして参加した「青年と共に考える国際協力」では、それぞれが熱い思いを語り、会場からも様々な意見が寄せられました。「国際協力」と一口に言っても、思いも関わり方もそれぞれです。しかし、誰もが「何かをしたい」という思いを自分なりに形にしていこうとすることにこそ意義があるのではないかと感じました。そして普段接することのない方に直接会って交流し、これからの活動へのヒントも得ることができました。

来年は今年よりも更に充実したブース出展を目指して今からリーダーたちの間でアイディアを練っています。

（樋渡仁美・国際ユースボランティアリーダー）

第１回オール大阪チャレンジカップ〈サッカー〉

ゲームは思いやりを育みます

大阪ＹＭＣＡサッカーキャンプとして各地域のサッカーメンバーが集まり、２月18日（土）より１泊２日で生活を共にしながら「第１回オール大阪チャレンジカップ」を開催いたしました。今大会に向けて各チームは年間を通して子どもたちの人格形成はもとより、スキルアップ・チームビルドを行い、練習に励んできました。競技特性として勝敗が明白となりますが、参加した子どもたち一人ひとりが自分の力を出し切り、その力が「チーム力」となりました。また力を出し切ることで新たな課題を見つけることができました。

試合では、大阪ＹＭＣＡサッカーが大切にしているフェアプレーの精神が随所に見られ、ゲームメイトと過ごす大切な試合を一生懸命に取り組んでいました。また、試合だけではなく生活でも他者を思いやる気持ちが多く見られました。

今大会では「セルフジャッジ」※方式を用いました。プレーする子どもたち自身が、「勝敗」と「公正」の葛藤の状況の中で、判断や自分の考えを主張する機会といたしました。相手をゲームメイトとして認め合い、相手を傷つけない、欺かない等、日頃の練習成果を十分に発揮していました。

ＹＭＣＡサッカー教室の願いは、勝敗に一層の学びを深め、サッカーを通して他者を思いやる気持ちや主体的にサッカーの試合を楽しむ等、精神・知性・身体を個々の成長スピードにあわせ育み、一人ひとりの力を「チーム力」として表現することです。これからも日頃の練習やオール大阪チャレンジカップによって一喜一憂しながら子どもたちが育まれることを願っております。（菅　秀晃・大阪東ＹＭＣＡスタッフ）

※セルフジャッジ：審判と子どもたちでゲームを進め、審判は子どもたちの公正さや判断を見守りながら、援助的に関わります。アウトオブプレー（ボールがコートの外に出ること）時にその機会が期待できます。

第１回里山フォーラム　紀泉わいわい村

共生社会「里山」を元気に

１月30日（月）～31日（火）、紀泉わいわい村にて、「里山」をキーワードとした活動の運営者や実践者たちの語り合いの場が開催されました。テーマは、「里山の意味、価値、未来像」。本来は、参加者それぞれの活動の根本にあるべきテーマなのですが、普段の現場ではつい暗黙の了解となってしまう部分でもあります。

参加者38団体55名の、里山への関わり方や形態は様々で、生活伝承、林業、狩猟、環境保全、環境教育、ＮＰＯ法人、行政、大学、民間団体など、実に多様な視点からの熱のこもった意見が寄せられました。参加者は、この機会に大いに語り、聴き、思いを深め、また自らの啓発のため、活動の発展のために視野を広げ、学び合いましたが、里山の現在と未来における意味と価値は語り尽くされることがなく、囲炉裏端での交流は、深夜まで続きました。

里山フォーラムでは、里山の意味や価値を定義づけることが目的ではありません。実行委員会の思いは、多くの参加者と共に本質に立ち返ることで、ネットワークを紡ぎ、パワーアップする場を創ること、日本が世界に誇る共生社会「里山」を元気にすることなのです。（林美由貴・紀泉わいわい村スタッフ）